

## ヤコブ1章9～18節「御父からの贈り物」

人は、物事がうまくいくと自分の功績とし、うまくいかないと誰かのせいにするのがよくあるのではないのでしょうか。自分に間違いがあるかどうか顧みるよりも先に、他人のせいにし、神のせいにすることがあります。罪人の姿です。しかし、まことの神は人に罪を犯させることはなく、完全に正しいお方、愛に満ちたお方です。

### 1. 身分や貧富の差（：9～11）

ヤコブは信仰生活にも様々な試練があると語り始めました。人生の試練というと病気、事故、災害などが挙げられます。ただ、そうしたことはある人には重なることもあれば、ある人は経験しないで過ごすこともあるでしょう。しかし、誰もが経験する日常的な試練として、身分の差やそれと関係する貧富の差があります。古代ではそれらの差が歴然としていたでしょう。9～10a節。

当時の教会の群れの中には、身分の高い人もいれば低い人もいて、教会の中でも身分の違いを乗り越えることができないことが多かったのでしょう。しかしヤコブは身分の低い兄弟に、「自分が高められることを誇りとしなさい」と言います。身分の違いはあっても、キリストによって救われ、神の前に同じ立場、兄弟であることを誇るようにと勧めます。

また、当時の教会の中には、富んでいる人もいれば、貧しい人もいたようで、富んでいる人が影響力を持つことがあったことでしょう。しかしヤコブは富んでいる人に、「自分が低くされることを誇りとしなさい」と言います。富んでいる人が尊敬を受けるということではなく、自らのことをキリストによって罪を赦していただいた罪人に過ぎないと認め、ただ神の恵みによって救われたことを感謝しなさいと勧めているのでしょう。

困難な境遇にある人は信仰が弱いと思うようなことがあってはならないし、献金を多く献げる人が教会を動かせるということが決してあってはならないのです。

また、富んでいる人に対する忠告として、ヤコブはもう一つのことを挙げています。10b～11節。

草花にたとえられているように富はうつろいやすいということは確かにあると思います。富自体が悪であるわけではありません。しかし、富は一時的なものであり、富がそれを持つ人を救うことはできません。富んでいる人も貧しい人も神の御前に自分が低くされること、へりくだって、神の恵みに拠り頼むことで救われます。主イエス様は言われました。「だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることとなります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません」（マタイ6：24）。

私たちは富に心を縛られてしまいやすいですが、富は過ぎ去るものであり、神の御前において救いをもたらさないのですから、神にのみ信頼し、仕えることが大事です。「まず神の国と神の義を求め」ることが、身分や貧富の差からくる試練に対処する秘訣なのです。

### 2. 試練、誘惑（：12～15）

先に「試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい」と言われましたが、そう思えないことが多いでしょう。試練にあうときはむしろ、神が遠く離れてしまったかのように感じる、あるいは神が自分を罰しているかのように感じるがあると思います。しかし、そのような時にはこの箇所のみことばを思い出すべきです。

12節。試練を「耐え抜いた人は」、「いのちの冠を受ける」と言われています。「いのちの冠」とはどういうことでしょうか。「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によって害を受けることはない」（黙示録2：10～11）。このみことばから分かるように、「いのちの冠」とは、試練に耐え、死に至るまで忠実であった信仰者が、神のさばきを経て、御国で受ける栄冠であり、永遠に神とともに生きることです。

その「いのちの冠を受ける」との約束は「神を愛する者たち」に与えられます。ですから、人が試練に耐え抜く前、試練にあう前に、神を愛そう、主イエス様の愛に応えようと決心し、歩んでいる人にすでに約束されています。さらに言うなら、神を愛そうと決心する人とは、神のご計画にしたがって召された人です。「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となる」（ローマ8：28）のです。人が神を愛するようになるのに先立って、神のご計画と召しがあります。

ですから、まず神のご計画と召しがあり、神を愛して歩むようになり、その中で試練にあうけれども、耐え抜いて、いのちの冠を受けることになるのです。こうして、あらかじめ約束された祝福が試練を経た人に与えられるのです。それが

キリスト者の歩みです。私たちもその歩みの途上にあるのです。

しかし、この祝福にあずかる前に、危険性があることも覚えておかなければなりません。危険性があるから試練なのです。その危険性とは罪に陥る可能性です。

13節。ここで「誘惑されている」とか「誘惑する」と訳されていることは、12節の「試練」と同じことばです。そのことが表しているように、同じ出来事でも、信仰を成長させる「試練」にも、罪を犯させる「誘惑」にもなり得ます。それで、試練にあう中で誘惑を受けたり、誘惑に負けて罪を犯してしまったりすることがあります。その時に、「神に誘惑されている」と言うてはいけません。

アダムは自分の罪をエバのせいにし、神のせいにしてしまいました。この罪人の性質は私たちにもあります。私たちは何かうまくいくときは自分を誇り、失敗するときは人のせいにし、神のせいにするのです。しかし、神が私たちに罪を犯させ、悪を行わせることは決してありません。誘惑に負け、罪を犯した責任は自分自身にあります。14～15節。

ここに誘惑がどのようにして始まり、どのような過程をたどるのが言われています。まず自分の欲から始まります。私たちの内には生まれながらに備わっている欲があります。それ自体は罪ではないとしても、それを神のみこころから外れた方法で満たそうとするなら罪となります。

そして、罪の過程を人の生涯にたとえて語っています。罪は初め心の思いの中に生じます。その思いが大きくなって行動となって表れます。さらにその行動が習慣となり、やがて当然の結果として死に至るのです。

### 3. 良い贈り物（：16～18）

神に誘惑されると言うのは思い違いだとヤコブは指摘します。そして、神は愛に満ちたお方で、良いものを与えてくださるお方であることを強調します。

16～17節。神は良い贈り物、完全な賜物を与えてくださるお方です。そのことの代表的な例として「光」のことを挙げます。光があることで私たちは生きられます。また、神が光を造られたことから、私たちは神の御性質を知ることができます。光によって影が生じますが、神には影のようなものはありません。天体の運行によって生じる影は移り変わりますが、神は永遠、不変のお方です。変わることがありません。その父なる神は良いものを与えることにおいても変わることがありません。天の父なる神が与えてくださるのは、良い贈り物、完全な賜物、善なるものです。ですから、私たちは神を信頼することができるのです。

この父なる神様によって私たちキリスト者は救われました。18節。

父なる神様がみこころのままに、私たち一人ひとりを選び、召してくださいました。ご自身の子どもとしてくださいました。新しいいのちに生かしてくださいました。そのように私たちが救われたのは、「真理のことばをもって」です。聖書によって神について、イエス・キリストによる救いについて知り、自分を委ねました。そして、私たちが救われたのは初穂とするためです。つまり、私たちに続いて、さらに多くの人たちが救われるためです。

このように私たちが新しく生まれさせ、救い、初穂としてくださった天の父なる神様ですから、私たちが誘惑することはありません。むしろ、試練を耐え抜いて、いのちの冠を受けるまで導いてくださるのです。

私たち教会の一人ひとは皆、神の子ども、兄弟姉妹ですから、神の御前で同じ立場であることを誇りとしましょう。また、過ぎ去るものであり救いをもたらさない富に心をとらわれないように、まず神の国と神の義を求めらるるにしましょう。

また、神は私たち一人ひとりをご計画のうちに召し、救いを与えてくださいました。そして、約束して下さったいのちの冠を受けるまで導いてくださいます。私たちが試練の中でも耐え抜くことができるように助けてくださいます。そのことを信頼していきましょう。

試練は誘惑になることがあります。神は私たちが誘惑することはありません。誘惑にあうのは自分の欲に引かれるのです。父なる神様は私たちをご自身の子どもとしてくださったのですから、私たちに良い物を与えてくださいます。みことばによって教え、悔い改めと信仰を与えて、私たちの歩みを導き、正してくださるのです。父なる神様の良い贈り物によって信仰生活を続けられることを感謝しましょう。